



【派遣期間】2011年3月27日～4月2日
 【派遣場所】岩手県立大船渡病院（岩手県医療局より派遣場所指定）
 【主な業務】病院内の調剤業務全般

被災地の状況、需要は日々変動しているが、当時の状況について記述する。当院では日本病院薬剤師会（以下、日病薬）の薬剤師ボランティアに6人が登録、第1陣として2人が被災地に赴くことになった。登録に際し、月曜の朝から土曜まで業務できるよう、日曜午後に現地入りし、土曜日に戻る日程とした。日病薬からの派遣要件は自己完結型。自家用車を利用し寝袋、食料、飲料水も全て自前で用意することとなった。当時の秋田は物流が滞り、ガソリンを満タンにするのも困難な状況。飲料水やレトルト食品、インスタント食などを手に入れるのも苦労した。しかし、家族や当院スタッフの協力により飲料水や食料、そのほか必要と思われる物資が用意できた。調剤業務に必要なものとして、ノートパソコンを含め大概の物資を持参したが、実際に必要としたのは白衣・内履き・印鑑・ネームホルダー・今日の治療薬など通常調剤に使用するものであった。

われわれが派遣された岩手県立大船渡病院は、大船渡市および陸前高田市を網羅する基幹病院。高台にあり被災は免れたが、隣の県立高田病院や周辺の医療施設の倒壊で患者が集中した。高血圧、高脂血症、糖尿病、精神病などほとんどが慢性疾患で、まだ感染症が目立つ状況ではなかった。

震災前は80%院外処方だが、震災後は院内調剤のため、スタッフの疲弊が一番気遣われた。スタッフの中には避難所からの通勤、震災以来未だ自宅に帰らず病院に泊まり込んでいる方もいた。

その負担を少しでも緩和するよう応えることがわれわれの支援活動となった。また、同

自己完結型 装備で現地入り

時期に外部から派遣された薬剤師は岡山大学から2人、岩手県立中央病院1人であった。調剤内規を同院ホームページからダウンロードし、事前に読んでいたが、オーダーリングは稼働しており、調剤支援システムも当院と同じユヤマだったので違和感なく従事できた。さらに、処方せんには薬の棚番が併記され、外部の者にとって非常に助かった。

大船渡病院以外の医療機関に通っていた患者を対象に他院コーナーを設置、お薬手帳等を基に手書きで院外処方せんを発行していた。他院コーナーでは、患者さんがのんびりいる薬が何かを探るため、台紙に薬を貼り付けてものを作成していたが、われわれが持参した「お薬確認シート」は大変重宝された。このシートは、疾患別に薬品の画像と薬品名・規格が一覧になっている。

現場スタッフの疲弊緩和が目的

震災当初、医薬品などは大船渡病院に集約して供給されていたようだが、仕分けをする余裕はなく、不足した薬品を探す作業のみとなっていた。電気・水道等のライフラインが早々に復旧、震災3日後にはオーダーリングシステムも稼働し、採用薬以外の薬品は使用不可となった。

また、秋田県薬剤師会からお薬手帳を5000部譲り受け、持参した。院内では調剤・注射薬の払い出し・抗癌剤のミキシング・持参薬の鑑別などの業務で精一杯で、服薬指導やお薬手帳に記載する余裕はなかった。しかし、病院近隣のコスモ薬局、AIN薬局、気

東日本大震災 薬剤師ボランティア活動 ～岩手県立大船渡病院にて～

市立秋田総合病院薬剤部 南雲 徳昭



被災翌日の大船渡



大船渡丸

衣テントはあったが、プライバシー確保は難しい状況でストレスの緩和も必要と感じた。

帰途は高田を経由したが、海岸沿いの町は跡形もなく、荒野と化し、川沿いに津波が襲い数km上流まで瓦礫の山並みが続いていた。これを目の当たりにし、津波の驚異と人間の無力を痛感した。高田の復興には20年以上かかるとも言われているが、今ここにいる人たちに最大限の支援と希望を与えてほしいと切に願う。

田村薬剤科長はじめスタッフの方々には、大変お世話になり深く感謝申し上げたい。薬剤管理指導業務等は当面困難とのことだったが、徐々に院外処方発行を拡大し、以前の体制に戻れるよう奮闘されていた。医療体制の復興も長期的な取り組みとなり、スタッフの疲労もうかがえる。被災地の状況が日々変わっていく中、当院からは引き続き薬剤師を派遣することが決まっており、大船渡病院薬剤科のスタッフの疲労、心労の緩和に少しでもお役に立てればと考えている。

最後に、派遣先の需要に応じた物的および人的支援を行う上で、被災地および派遣先の最新情報が必須。各県の派遣をコーディネートしている方々にはぜひこれらの情報収集と整理に尽力し、最新情報を派遣者側に提供されるよう協力願いたい。